

OG訪問

北海道で初めて緩和ケア病棟の承認を受け、緩和ケアの発展を牽引してきた東札幌病院で、薬剤師として働く和泉さん。緩和ケア病棟の担当薬剤師として、さらに2019年からは薬剤部門の長として、幅広い仕事に取り組んでいる薬学部25期生です。

東札幌病院薬剤部 課長

和泉 早智子さん (薬学部薬学科2002年3月卒業、
大学院薬学研究科修士課程2004年3月修了)



がん患者さんの力に

学生時代のがんセンターでの病院実習がきっかけでがん患者さんの支援を志すようになったという和泉さん。就職先に選んだ東札幌病院は入院患者の約8割ががん患者、和泉さん就職の5年後にはがん専門病院の認定も受けた、がん患者のケアに長年力を注いできた病院です。和泉さんも薬剤師としてがん医療の最前線に立ってきました。

がん治療に薬剤師が大きく関わるのは抗がん剤です。目覚ましい進歩を続ける化学療法の知識をアップデートしながらの抗がん剤のミキシング(調剤)は、薬剤師が手応えを感じる仕事の一つです。和泉さんの向学心も抗がん剤に向かっていました。しかし、病棟で多くの患者さんと話をするうち、和泉さんはもう一つの大きな役割に気づきました。それは「痛み」への対処です。「わたし自身、痛みが大の苦手です。痛みをがまんする患者さんも多いですが、痛みが緩和されればQOL(クオリティ・オブ・ライフ/生活の質)は確実に高まります。抗がん剤の専門性を追求する薬剤師は多くいますが、痛みを緩和する薬の専門家も、同様に必要とされているのではないかと、それなら自分が、と思ったのです」。

緩和ケアの専門性を

和泉さんは「誰にも負けないくらい緩和ケアの薬剤に詳しくなろう」と目標を定めました。緩和



和泉さん率いる薬剤部の薬剤師は総勢15人(ほか薬剤助手3人)。うち11人の薬剤師が本学卒業生です。ちなみにユニフォームは白いワンピースか、紺のパンツスタイルかを気分で。

ケアが一般の治療と違うのは、治療に向けた積極的な治療ではなく、患者さんの体や気持ちの辛さを和らげ、人生の最期までその人らしい日々を送ることに重きを置く点です。医療用麻薬を正しく使って痛みをコントロールすることが重要で、薬剤師にも高い専門性が求められます。和泉さんは2010年に認定制度が始まった緩和薬物療法認定薬剤師を翌年に取得、2019年に始まった緩和医療暫定指導薬剤師も取得、現在は、今年認定が始まった上位の資格、緩和医療専門薬剤師の取得をめざしています。

「緩和ケアの認定資格を取得してから、チーム医療の中で頼られることが増えました」と和泉さん。医師から相談を受けることも多く、知識を総動員して複数案を提示、高い専門性が患者さんにとってベストの方法を導き出す力に直結することを実感しています。「自分の知識が患者さんの役に立つ喜びは、次へのエネルギーになります」と和泉さん。頼られるほど学ぶ意欲が増し、もっと患者さんの役に立てるようにするという好循環が生まれています。



毎日の課長業務の一つが、看護課長と行う病棟設置の医療用麻薬の管理。「正しく使用すれば依存や中毒は生じないといわれますが、ご家族の誤解・不安も多いので、理解してもらうよう丁寧に説明するのも薬剤師の役割です」と和泉さん。

プレイングマネージャー

本学大学院修了以来、勤続18年目の和泉さん。一昨年から管理職としての役割も加わりました。課長として他の薬剤師の業務のチェックや後輩の指導、麻薬の管理をはじめ、薬の採用に関わる薬事審議会への参加、医療安全管理者としての安全対策業務など病院運営全体に関わる管理者の視点・思考が求められています。和泉さんの姿は、経験を積んだ薬剤師の一つのロールモデルです。

「患者さん、医師、看護師、他の医療職と連携して多彩なケースにあたり、様々なやりがいを感じられるのが病院薬剤師の面白さ」という和泉さん。「忙しさを言い訳にせず、知識のアップデートを怠らず、定年を迎えた時に『よく働いた!』と自分を褒められる、充実した毎日を送ろうと心がけています」。明るく放った、ずっと先の「定年」という単語に、腰の据わった和泉さんらしい仕事への愛情と覚悟がにじみ出ていました。



緩和ケア病棟では、患者さんが終末期を穏やかに過ごし、尊厳ある最期を迎えられるよう多職種が力を合わせます。患者さんの詳細な情報はもちろん、人生の大事な時間に立ち会うことへの思いも共有されています。



病棟で、全入院患者さんの内服薬を1回分ずつセット。看護師が行うことのない業務ですが、薬剤師の目で重複や相互作用、服用できているかをチェックします。